

福川「柏屋」かしわや探究

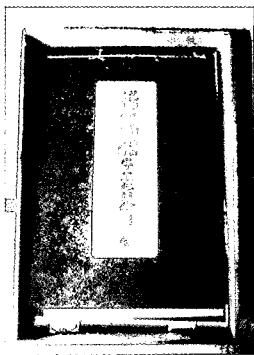
會員 西村 修 一

県下の最大の大資産家

「福川の土地のほとんどは福田家（柏屋）の土地」と言われているが、本当にそうなのか。

福田本家（東京）の当主協平氏きょうへい歿後、新宅の福田雅正氏みやこは周南における仏事と財産管理を委託されることになり、また東京の本家にあつた資料や地元福川で事後を託されていた関係者より、多くの資料がもたらされることになり、忘却されていた柏屋福田家の威容が明らかになりつつあつた。中には貴重な勲章や写真などもあつた。整理には膨大な時間を要しそうで、雅正氏の後継者である尚子女史なごにまで及びそうだ。

その中の一つ、柏屋の所有地を記した「福川村字限地引絵図」と「花岡 末武南 徳山 富田 夜市 戸田字 限地引絵図」を新宅福田宅で見せてもらった。「柏屋」は福川だけでなく、福川以外にも広く土地や山林を所有していた。その分厚い資料を一ページ毎にめくるたびに、嘆息せざるを得ない。それは県屈指の大資産家の有り体であつた。



字限地引絵図

柏屋の絶頂期にまで達し、戦後政策のためほとんどの資産を失った、文字通り柏屋の天国と地獄を経験した衆議院議員（第二〇回）悌夫ていぶによる『祖先記』原稿（平成二五年雅正氏により刊本）によると、文禄慶長の頃（一六世紀末）、大津島より福川浦に渡った福田隆吉の長男の安則が西町福田家（本陣家）に、次男の太郎左衛門が中町福田家（のちの古庄屋ふるじや、脇本陣家）となり、競いながら統をつないでいった。『新南陽市史』は本陣家四代清

澄の時には徳山藩家老粟屋氏の末娘が嫁いでくるなど絶頂期と報告し、中町福田家の六代目孫三が、徳山の野村や富田の道源みちげんと共に野島のしま（防府市）に遠島になっており、「金持ちだからこういうことになるのだ」と野村は憤慨し、悌夫は「徳山藩内の豪農に対する賦課に関してである」と推察している。その頃、中町福田家もすでに福川を代表する豪農なのだろう。悌夫は重要な情報を伝えている。野島遠島の理由の一考察として、「（孫三は）徳山藩家老福岡某と姻戚関係にあり、彼の墓は福岡家の菩提になく、独り離れて富海にあるので、藩の政事疑獄

に連座したのではないか。『お聞き及びの筋あり』として、有無も云わず遠島を申付けられた」とあるので、野村・道源・福田という富裕者を巻き込む政事疑獄があったのかもしれない。研究課題である。ちなみに、野村は遠島中に潮流を調べて開作事業を起こし（野村開作）、孫三は島民に読み書きを教えて島民に慕われた。

中町福田家が徳山藩家老と姻戚関係を築いているので、この頃はすでに本陣家と形勢は逆転している。見るか、家老同士の権力争いで、かつて家老粟屋氏と姻戚関係のあった本陣家と対抗させられたかは、調査研究の余地がある。

中町福田家の弥五郎（延宝五年（享保一八年）が独立して中町の浜辺辺りで質商を始めたのが名義上の「柏屋」の創立になるが、悌夫が「当時は、耕作は乏しく、さしたる産業とでなくて、ただ山陽道沿いの寒村たる一漁村にすぎず、住民は貧乏で多くは安んじておらず、質蔵を盗賊に襲われたり、蔵品を船で運び去られたりすることがあった」と書くとおおり、とん挫し、その子の忠四郎は

中町福田家に戻ってしまった。

忠四郎の孫の嘉兵衛が、文政一一年に、再び中町を出て東町（龍の門のあった屋敷）で酒造業を始めたので、悌夫はこれを「柏屋再興」とするが、私たちが知っている柏屋の実質上の初代であるし、本稿ではシンプルに「初代」として扱いたい。

嘉兵衛は二六歳の時、庄屋を命じられたとあり、天保三年（一八三二）に塩田を竣工し、徳山藩より塩田勘定役にも任ぜられているので、すでに本陣家との形勢は逆転しているか。「柏屋」の基礎をつくった。

* 『祖先記』：福田家の起源（諸説紹介）から、福川に移ってきたいきさつ、本陣家から分かれ、「柏屋」を興し発展、基礎を築いてきた、嘉兵衛一丈之進（貴族院議員）一父の秀夫（県会議員）に至るまでの悌夫氏による著述。

嘉兵衛は地元に大いに貢献している。嘉兵衛が「福川真福寺の開基」とされるように、真福寺が地方の大刹として寺運隆昌の基礎をなしたのは嘉兵衛の功績である。

山崎八幡宮の社殿の寄進者の名札の筆頭であり、辰尾

神社の参道の改修にも骨を折った。ただ山林所有は土地争いを厭っていたので積極的ではなかったが、戸田四郎谷の田地を所有したのは漁業権の関係である。福田雅正氏は「柏屋」の躍進確保は、この漁業権の獲得が大きかったと分析されている。

「およね婆さんに会ってきた」と目を細め、月に一度は宮市（防府市）の天神様に福川から歩いて参詣したというから、嘉兵衛の実直さがわかる。彼の葬列（明治一三年）は本宅から真福寺まで延々と続いていたというから、彼の人徳ぶりが知れる。

嘉兵衛は子になかったために、隣家の「嶋屋」（原田）に嫁いだ姉の子の次男の丈之進じょうしんに家督を譲った。慶応三年（一八六七）のことである。嘉兵衛は家屋敷とわずかな資本金の分与を受けただけで柏屋を再興したのだが、隠居時の資産は小作米三五三俵、塩田二塩戸、畑・山林、貸家二〇軒、酒造設備、家財・自宅及び現金二万両に達していた。悌夫は嘉兵衛を「偉大な平凡人」と評している。

* 『市史』に合わせ『祖先記』資料の系譜は「嘉平衛」と

表記したが、『祖先記』本文、戸籍謄本、墓碑銘とも「嘉兵衛」であることを念を押しておく。

丈之進の才覚は「柏屋」を多角的に飛躍させた。先ず若き丈之進は干拓事業に着手する（西南役後の不況を鑑みて起工）。一八歳で年寄役をつとめ、廃藩置県後の代議員から始め明治二二年に県會議員に選ばれ（以降、一二年在職）、徴兵參事院を遍歴。悌夫が「丈之進が黄綬褒章を授与されたのは、海防費として金壹千円を献納したからで、井上馨が寄附勤誘に来邸したようで、井上の『金持ちの住める村々名もよろし 富海 福川 富田 徳山』という歌はこの時に作ったものかもしれない。富海は入江、福川は福田、富田は道源、徳山は野村を指したものでらう」と述べているから、「柏屋」は福川を代表する資産家で名士になつていたということになる。

丈之進は福川銀行を創立した。ちなみに、福川銀行は石炭産業初期に先駆けて宇部にも支店を出し、のちに頭取も丈之進―秀夫―民平―みへい悌夫と引き継がれた。そして、大正一三年に、悌夫が交渉を進めて、「百十銀行」（現山

口銀行）と合併した。

丈之進は山陽鉄道株式会社の発起人となり「福川駅」を設置した。地元福川発展の基礎をなしたと言つてよい。共栄汽船株式会社の取締役をつとめ（当時瀬戸内海運輸において大阪商船に対抗して譲らなかつた）、建築、印刷、移民事業にも着手した。しかし、「丈之進の志は専ら商工業にあつたように思えるが、先代からの酒造業は家業として怠ることはなかつた。倉庫を増増し、酒造石数を大いに増やした。銘柄には『柏葉』『養老』があつた」とも悌夫は記す。丈之進のとき柏屋は大地主になつた。「丈之進が最も力を入れたのが農地であつた。よくもあんなに田地を求めることが出来たものだと思えるほど、次々に買い増し手に入れた。福川以外にも富田、富岡、夜市、戸田、徳山、末武、須々万、秋穂などに田地を所有するに至り、福川に至つては文字通り（柏屋の土地を通らなくては何処へも行けない）というほどであり、丈之進の晩年には加徴米が二千俵に達し、その他に山林・畑・宅地・貸家などを所有した」と悌夫は記す。丈

之進が家業としての酒造業、製塩業、銀行業を堅実にしながら、その余力で事業に関係してゆき、県下の大地主として産を治めたのである。「丈之進は創業者嘉兵衛と同じように勤儉家ではあるが、消極的な理財家ではなく、資本主義上昇期の経済に明敏に対処できる才腕ある事業家である」と悌夫は評する。丈之進は本宅の二階の一室



福田丈之進（貴族院議員）

を洋風の〈銷夏楼〉にしたり、銀行には螺旋階段の三層楼を設けたり、おしゃれでありハリイカラな一面を持っていた。

明治二三年の帝國議会の開設時の貴族院多額納税議員の互選（一五名）では、県を代表する多額納税者となっていた。丈之進が没した年、明治三〇年の県から郵送された「貴族院多額納税者互選名簿」が封筒のまま出てきた。ちなみに、明治三〇年の県下ベスト一〇は、①野村恒造（都濃郡徳山村）、②吉川経健（玖珂郡横山村）、③

菊谷剛十郎（阿武郡萩町）、④山本七右衛門（大津郡三隅村）、⑤滝口吉良（阿武郡明木村）、⑥堀濟三（都濃郡末武北村）、⑦坂本貞三（熊毛郡三丘村）、⑧福田丈之進（都濃郡福川村）、⑨上原権蔵（都濃郡末武北村）、⑩吉林重治郎（吉敷郡小郡村）で、丈之進は県下第八位である。ところで、五代目の悌夫の時には、「昭和一四年の最後の貴族院多額納税者議員互選では余が県下最高の地租納税者になっていた」と述べているから、柏屋は丈之進以降も着実に事業を拡張し、資産を増やしていったことになる。戦前には、県下一の大資産家になっていた。されど、今は旧地には、その痕跡すらなく、柏屋のシンボルであった「龍の門」は資料館の入り口になっている。ある意味、「柏屋」を引き継いでいるのは地元福川の民俗資料展示室なのかもしれない。

福川の原田家

福川において、福田家と並んで重要なのは、原田家である。夜市より進出して、廻船問屋、酒造業、味噌製

造、塩田経営などの諸職に従事していた。

原田家は、福田家と同じく、九州に祖先を求め、根拠となる史料が提示されない以上、ありがちな同姓に拠った付会の類とされても致し方ない。郷土史会の研修旅行で古代伊都国（糸島市）を訪れたが、糸島平野を見下ろす高祖山こそ、祖先と仰ぐ原田氏の居城があったところである。原田一族はツアーを組み、麓にある高租神社に参拝したという。

矢地市を通る旧山陽道が急に南進し、夜市川沿いの土手に合流するわけだが、その矢地市のT字路の南西角に原田家の総本家があった（現在住宅地）。北側の古い由緒ありげな白壁の館が、分家の「俵屋」である。「夜市の七不思議」の金水・銀水があったところである。南東角のこれまた白壁の良い雰囲気建物が並ぶのが、さらなる「俵屋」分家で、さらにここからの分家筋が主に福川に出て塩田を生業にしていた。

市郎右衛門を祖とする総本家より、俵屋と時を同じくして分家して福川に出たのが嶋屋（沖嶋屋）で、その分

家が通称味噌嶋屋である。今は、シマヤ味噌やだしの素で有名である。さらにその分家が、原田忠蔵―丈之進（二代目柏屋）―秀夫（三代目柏屋）―悌夫（五代目柏屋）らの血筋を出した、味噌嶋屋新宅（醤油嶋屋）で、味噌嶋屋の向いにあった。

丈之進は味噌嶋屋新宅からの養子である。丈之進も実子の民平が幼少だったため、柏屋の後継者を味噌嶋屋新宅（原田屋）より実兄の子の秀夫を長女ヨシの入り婿として迎えた。民平が成長すると、柏屋の家督は民平に譲られ、秀夫は分家した。その民平（四代目）にも子がなく、新宅を興した福田秀夫の子の福田悌夫が相続した。

原田一族は分家筋が新天地福川にて商才を發揮している。夜市市の山陽道から戸田駅に向かう途次に「天王社」がある。実は、かつて参道はズツと総本家近くまで延びていて、総本家の近くには大きな鳥居があった。その天王社を福川に分祀したのが、福川の辰尾神社の源流となっている。福川は、福田と原田が大いに関わって大きくなった町だ。ようやくその構造がわかりかけてきた。

福田家と原田家の両方の血を持った福田悌夫は県下一の大資産家になった。

仏山先生

九州には縁があるなど思った。徳山郷土史会の研修旅行で行橋市の歴史資料館を訪れたとき、ふと仏山先生の愛くるしい写真のあるパンフレットが目についた。行橋市には何度か来ている。隣の荻田町には九州の最古級の前方後円墳である豊前石塚山古墳がある。瀬戸内海における九州の玄関として、「会誌」で石塚山（トヨ）―竹島御家老屋敷・宮ノ洲古墳（スワ）―妙見山古墳（イヨ）の大和政権系ネットワークを披露したことがあるが（会誌三三三号）、神籠石もスワ（石城山）―トヨ（御所ヶ谷）を結ぶように行橋市にあった。神籠石とは白村江の敗戦以降、瀬戸内海航路の上に築城されたという防衛施設で、要衝の地であることが絶対条件である。

秀夫（「柏屋」三代目）の息子である悌夫（「柏屋」五代目）が秀夫の自伝『仏山問話』を出版している。『祖先記』

出版の中では一部抜粋紹介した。

「私は明治二年、一二歳の時、周防国都濃郡湯野村の福永淑人先生の塾に二年ほど学んだ。豊前国の仏山先生の許への入門を薦められたのは福永先生であった。それで明治八年三月三日の桃の節句に、叔父（二代目丈之進）に伴われて稗田村を訪れた。」「仏山先生は塾生と近郷へ花見に清遊しておられ、私たちは長崎まで遊びに行くつもりだったので、叔父は若先生に入門を申し出て内諾を得ると、私たちはそのまま宇佐に詣でて、耶馬溪を探索して、長崎へ行った。帰路は船で玄界を渡り、再び豊前に帰って正式に仏山塾に入門した。一六歳の時であった。それから五年、明治一二年まで塾にいた。私は仏山塾最後の塾生だった。」

郷土湯野村の福永先生に紹介されたという村上仏山は、豊前国京都郡稗田村（行橋市）生まれで、幕末から明治にかけて活躍した漢詩人、儒学者である。一五歳で筑前秋月の古処山堂に入門し、その後、京都や博多など諸国を歴訪したのち、天保六年二六歳の時、郷里で仏山

塾を開いた。

明治八年七月二十七日 福川町 (商) 原田民良三男

秀夫の足跡をたどるように、行橋市の仏山塾跡を訪ねた。彼の『仏山堂詩鈔』は各地の私塾で教科書となっており、仏山の名前は全国的に知られていた。行橋市歴史資料館の山中英彦館長に段取りをつけてもらって、休日

原田勢造 一八歳 世根作紹介
同日 同町 (商) 原田民良四男 原田健作 一二歳
世根作紹介

にもかかわらず、地元の市民学芸員の森岑^{しんじん}而会長^じの自家用車で案内してもらった。「最近^{さいじん}は官兵衛ばかりで、神籠石のほうは勤^{きん}が鈍^{どん}っているかも」とジョークを飛ばしながら、御所ヶ谷神籠石^{みどころかみやまかごいし}に向かい水哉園^{みづさいえん}(仏山塾跡)のほうへまわってもらった。御所ヶ谷神籠石は写真で見ると以上に勇壮だった。水哉園では当主の村上良春さんに仏山堂文庫の中の貴重な資料を見せてもらった。森会長が村上先生(高校教諭)と懇意^{こんい}だということ^{こと}で口添え^{くそえ}を頂いていた。福川町の入門者を四人見つけることができた。

明治八年四月二十七日 山口県福川町 (商) 原田忠藏

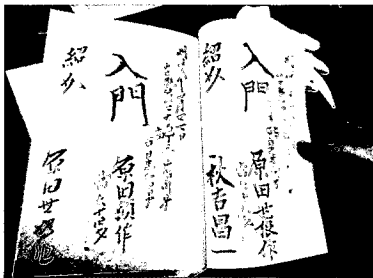
次男 原田世根作 一八歳 秋吉昌一紹介

同日 同町 (商) 原田忠藏四男 原田頼作 一四歳

原田世根作紹介

『祖先記』にもある通り「原田世根作」が福田秀夫の幼名である。世根作は弟と一緒に豊前の仏山塾に入門したことになる。秋吉昌一は不明だが、おそらく塾生であろう。同日入門なのに、弟の頼作の紹介者に世根作がなっている。必ず紹介者を「入門姓名録」に併記するようだ。夏には追いかけるように、親戚の原田民良の息子たちも入門している。

仏山塾の入門生は福川地区では原田家だけであった。県外は少数である。山口県でも福川の原田家は際立っている。中町原田家には子弟に学問を学ばせる気風があったのか。



入門姓名録 (仏山塾)

秀夫はこんなところまできて学んでいたのか、と周辺をあらためて見渡した。森会長に、地元の有名人塾生の末松ケンチウ宅を案内しましょう、と言われた。「誰だよ」と思ったのだが、『防長回天史』を編纂した、伊藤博文の娘をもらった、内務大臣を務めた末松謙澄だった。博文公と一緒に写っていた光市の伊藤博文記念館の大きな写真を思い出した。

意外なところで、意外なモノ同士がつながっていた。果して実地見聞の大切さを実感した旅だった。この積み重ねが私の基本的なスタンスなのである。歴史発見のニュースを聞くと、私は関東にでも関西にでも出かけてゆき、現地説明会やシンポジウムに積極的に参加している。

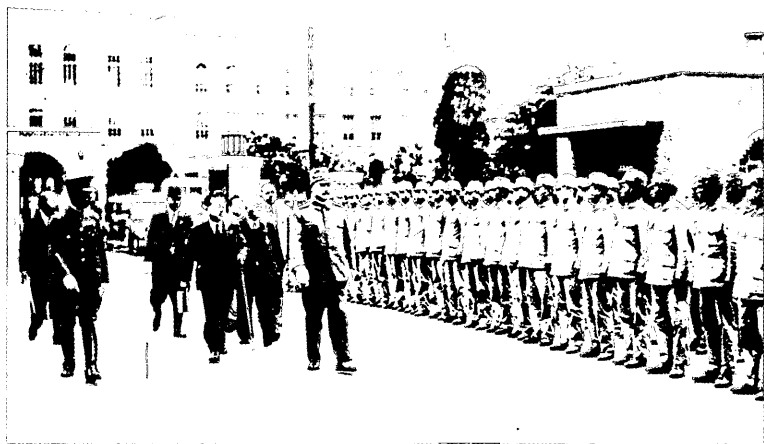
おわりに

『祖先記』を著述した悌夫は戦後の財産処分で苦悩した。手続き上の煩雑さより、精神的な苦痛のほうが大きかっただろう。『祖先記』を著わしているときどんな気持ちだっただろう。ありふれた小さな町の造酒屋から興

して、県下ナンバーワンの事業家、大地主に、名士へとステップアップしていった「柏屋」のけっして平坦ではなかった道のり。祖先たちの努力精進の上に、東大で学ぶことができ、文学士たちと交流ができ、国会議員として東京を往復し、人ができぬ体験ができた。県下一の名士、大資産家としての自分があった。その祖先たちが築き上げてきた「柏屋」が我が代で終わってしまう。「柏屋」絶頂期と引導の渡しという役回り。

東京中野の邸宅は昭和二〇年の空襲で家財類の大部分を焼失した。農地改革、地主解体、多額の財産税の徴収、物納。軍の施設のため土地は荒廃し、台風で山林は立ち枯れになった。彼を慰めてくれた囲碁に感謝したい。文学青年で、平和主義者の悌夫と入れ替わるように、政界で躍動し始めた同級生の岸信介。その交差点で、二人は巢鴨プリズンで会っていた。なんてドラマチック。

「龍の門」を一〇年間、毎日のようにくぐりながら、去年初めて知った悌夫だが、顕彰会設立への一步を踏み出せたような気がする。



福田悌夫 衆議院時代皇軍慰問 満州京城日報社写真部



福田悌夫 第一高等学校時代 与謝野鉄幹・晶子夫妻と